

ある少年の正月の日記

小川未明

一月一日

学校から帰ると、お父さんが、「今年から、おまえが、年始におまわりなさい。」と
いって、お父さんの名刺を四枚お渡しなされた。そうだ、僕は、十二になったのだ。
十二になると、お父さんのお代わりをするのか、知らないけれど、急に、自分でも
大人になったような気がする。お母さんから、あいさつのしかたをならって、まずお
隣からはじめることにして、出かけた。

一月二日

たくさんさんの年賀状の中に、僕にきたのが二枚あった。川田と西山からだ。学校で、
いちばん親しい二人なのだ。なぜ、僕も早く書いて出さなかつたろう。もらってか
ら、出すのでは、なんだか冷淡のような気がする。いっそ、二人のところへ訪ねてゆ
こうかしらんと考えたが、お正月は、めいわくだろうと思つてやめた。二枚とも、
「遊びにきたまえ。」と、書いて出した。

一月三日

お隣の勇ちゃんがきて、寒ぶなを釣りにいかないと誘つた。勇ちゃんは、中学の
三年生だ。去年の暮れ、釣り堀へいったときに、おじいさんが、「新年は、三が日の間
懸賞つきで、寒ぶなをたくさんいれますよ。」と、いったからだろう。僕、新年早々、
殺生するのはいやだといつたら、勇ちゃんもゆくのをよして、二人で、ボールを投げ
て遊んだ。

一月四日

風ごろ、カチ、カチ、という、ひょうし木の音がきこえる。今年から学校へゆく弟
が、「あいつはせつかちだから、おもしろい！ やあやあ、コッツが、泣きおるわ。いま
血をすわせてやるぞ……。」と、紙芝居の、チャンバラの手まねをして駆けだす。僕
は、悲観してしまった。

一月五日

姉さんが、カルメ焼きを造るといって、火を落として、新しい畳の上に、大きな焼け穴をあけた。そして、お母さんにしかられた。いつも、僕たちが、畳をよこすといつて、しかられるので、ちよつと痛快に感じた。

一月六日

外で、たこのうなり声がする。窓を開けると、あかるく日が射し込む。絹糸よりも細いくもの糸が、へやの中にかかって光っている。へやがあたたかなので、目には見えないが、冬もこうしてごく小さなくもが、活動しているのを知った。

一月七日

明日から、学校だ。また、予習もはじまる。大いにしつかりやろう。橋本先生は、僕たちのために、いつもおそくまで残っていてくださる。あ、先生に、年賀状をあげるのを忘れた。しかし僕は、ありがたく思っている。あした、お目にかかって、おめでとつをいおう。今夜、これから、なにをして遊ぼうかな。